

山本有三『路傍の石』・田山花袋『温泉めぐり』にみる 地理に関する覚え書き

志村 喬 (上越教育大学)

I. 山本有三著『路傍の石』と地理

今から 10 年前の 1998 年 7 月、新潟地理談話会の第 2 回夏季巡検で栃木県栃木市を訪問した。その時、栃木市の市街地を歩きながら島吾郎先生が、栃木市出身の山本有三 (1887 ~ 1974 (明治 20 ~ 昭和 49 年)) 『路傍の石』について熱心に話していたことを記憶している参加者は多いと思う。

私も、島吾郎先生が「主人公は「吾一」って言うんですねーこれが……。エッと、私は「吾郎」って言うんですが……。と、ともかく吾一が鉄橋にぶら下がって汽車が来るシーンなど、よく覚えてますって……。ホントに……。といったようなフレーズが、古い栃木市街地の町並みを歩く吾郎先生に重なって印象的だった。

そんな記憶のある栃木市を 2008 年 2 月、私の研究室のゼミお別れ旅行¹⁾で再訪した。以前に比べ中心市街地は、古い町並みを活かした観光地化が進んでおり、多くの観光客が訪れていた (新潟交通の観光バスツアー「クレヨン」の団体もみられた)。同時に、古い家々は観光客向け施設として整備され公開されているものが多くなっていった。私が入った山本有三記念館は、山本が子どもの頃に住んだ家の隣家をそのまま使ったもので、当時の雰囲気の中で山本有三を知ることができるなかなか良い施設であった。

記念館の展示情報の中で私が最も関心を持ったのは有三が通った書店だったが、その店は既に失われてしまっていた。そこで、現在営業している書店に入った。するとさすがに生誕地、有三の書籍は平積みになっている。せっかくの記念と考え、記憶の失われている『路傍の石』(新潮文庫)を購入してみた²⁾。

『路傍の石』は、1937 (昭和 12) 年、有三 50 歳の時期に朝日新聞連載小説として発表され、時勢下の圧力による掲載紙の変更を経て、最終的には 1940 年に未完のまま終わった名作である。内容は、栃木の没落した士族の家に生まれた主人公である吾一が進学叶わず、郷里では呉服屋での丁稚奉公、東京では印刷工場勤めをしながら苦学する物語で、前半は有三の自伝といわれる。私よりも上の年代には、よく読まれた少年向文学である。今回購入した新潮文庫版は、1980 年初版発行、2003 年 31 刷改版、2006 年 36 刷であるから、それなりに現在でも売れているようだが、実態は不明である。

そして、この『路傍の石』を今回読んだところ、地理に関係する記述が次のように 2 箇所あった。そこで、ここに記し覚えにしておきたい。

1. 吾一が東京の夜学の授業で惹かれたのは「型破りな地理教師」の授業

東京の印刷所で働くようになった主人公の吾一は、小学校時代の恩師の計らいから夜学

1) 基本的に前年度もしくは当該年度の修了生居住地域を 2 月頃に巡検している。2002 年度の村上市からはじまり、長野県更埴市、石川県加賀市、愛知県名古屋市、東京都八王子市を訪ねてきた。

2) 以下の引用は、新潮文庫版による。

の商業学校で勉強するようになる。そこで受けた最初の授業は地理で、その授業に吾一は次のように魅せられている。

地理の教師は、黒板の前にかけてある世界地図の上を、ムチでさししながら、「ここはどこですか。」と、ことさら意味ありげに、ぐっと教室を見わたした。

.....

教師の話が終わると、多くの生徒は拍手をした。

吾一はあっけにとられていた。教室で拍手をするなんて、彼には思いもよらないことだったからである。

しかし、先生の話はじつにおもしろかった。おもしろかったと言っても、先生に対して、失礼にあたるかもしれないが、学校ってものは、もっと型にはまったものと思っていたところ、この先生の話は、生き生きとしていて、ひたひたと胸に響くものがあった。教科書の中のことは、ひとことも話してくれないが、それは教科書以上に、ためになるように思われた。

.....学校っていいな！と吾一はしみじみ思った。

次野（小学校時代の恩師：志村注）のはからいで、彼は秋の学期から夜学の商業学校に、かようようになったのだが、その第一時間めがこの地理の授業だったので、彼はすっかり喜んでしまった。.....

二時間めの算術と、三時間目の英語は、地理の時間のようなことはなく、型どおりの授業だった。彼はだんだん学校にかよっているうちに、あの地理の先生のような人は、私立でも、やはり、型やぶりのほうなのだということが分かった。

(pp.349-358 抜粋)

話の中身は別として、教科書を使わない型破りの地理授業を評価していて、嬉しくなる記述である。ただし、この型破り教師はその後、学校改革の中で、「教科書を使わない」云々で次野先生とともに解雇されてしまうことにも、現在は注意すべきかもしれない。

2. 吾一が働いていた東京の印刷所は「大明堂」

吾一が働いていた印刷所は、もらい火により焼失してしまうが、社として最重要である預かっていた原稿の箱は、吾一がいち早く判断し持ち出しておいたため、事なきを得る。そこで、吾一は、印刷所主人から次のような言葉をかけられている。

工場は焼けても、原稿を一枚も焼かなかったということは、大明堂の信用をどれだけ大きくしたか分からない。今度はわたしも、物質的には相当の打撃を受けたけれども、そんなものはいくらでも回復することができる。しかし、失った信用はなかなか回復出来ないからね。

(p.466, 下線は志村)

これを読んで、今は無き地理関係出版社であった大明堂を思い出す人は多いであろう。有三が記した大明堂が、私たちが連想する大明堂と関係があるのか、無いのかは調べていないので不明である。

『路傍の石』に関しては以上の2点である。地理を学んだが故に楽しめた内容として受け取っていただければと思う。

II. 田山花袋と地理

自然主義文学者の代表者である田山花袋(1871～1930(明治4～昭和5))は、山崎直方・

佐藤伝蔵による『大日本地誌（全 10 巻）』（1903～1915(明治 36～大正 4)年，博文館)の編集に従事している。これは、花袋が 31 歳から 43 歳にかけての 13 年間にわたり、この間に、文壇での評価を築いた『布団』（1907(明治 40)年)を発表している。

このような経歴を持つ花袋の作品が地理学研究対象になることは、1909(明治 42)年に発表された『田舎教師』を中心地理論の教授学習教材にした杉浦芳夫「田舎教師の「マチ」と「ムラ」－中心地理論とは」(1992, pp.138-156)で明らかにされている。1917(大正 6)年に発表された『東京の三十年』を文学的都市論として考察した前田愛「田山花袋『東京の三十年』－牛込」(1991, pp.75-86)も、地理学的研究である。それまで近代文学史上の作家名・著作名としてしか知らなかった私は、杉浦の著作に刺激され『田舎教師』は読んだものの、その他の作品は未読だった。

ところが、花袋が 1914～1916(大正 3～5)年に博文館から出版した『日本一周』が、昨年(2007)末、東洋書院から復刻されたのを機に、その他の著作を改めて読んでみた。すると、私なりの地理の楽しみがあったので、その中から特に『温泉めぐり』における新潟県関連記述を記してみたい。

なお、『日本一周』には、2008年3月11日付け新潟日報第1面の日報抄が親不知の記述を取り上げるように興味深い箇所が多いが、ここでは割愛する。

1. 『温泉めぐり』における新潟県

『温泉めぐり』は、1926(大正 15)年に博文館から刊行された温泉旅行案内書である。2007年に岩波文庫版が発売され、容易に入手し読むことができる¹⁾。内容は、日本全国の温泉地あるいは周辺地域を数頁で紹介するもので、全部で 105 項目からなっている。最後の 105 項目目は「満鮮の温泉」であり、当時の「日本」の地理的広がり・花袋の帝国領域意識をも知ることができる。

この 105 項目で、新潟県に関する部分は、次のような箇所である。

- | | | |
|------------|-----------|-------------|
| 34. 野尻湖付近 | 35. 赤倉温泉 | 36. 赤倉の一日二日 |
| 60. 越後の諸温泉 | 61. 北陸線沿線 | 62. 新潟へ |
| 63. 瀬波温泉 | | |

2. 新潟県の『温泉めぐり』では赤倉温泉の記述が特段に多い

上記の項目名で、具体的な温泉名があるのは、赤倉温泉(旧妙高高原町，現新井市)と瀬波温泉(村上市)である。「34. 野尻湖付近」も実質的内容は次のように赤倉温泉への路程の記述であるから、赤倉温泉の項目は 34 から 36 の 3 項目にのぼる。

三四 野尻湖周辺

長野を出た。豊野，牟礼と段々山の中に入って行くと，旅客は北信の三山の雄大な山の姿の次第にあらわれて来るのに心を動かさずにはいられまい。実際山に対して，これほど雄大な感を起こさせるところは，日本にも沢山はない。私の知っている範囲では，日本での高原性の気象の最もすぐれているところは，此処と，中央線の八ヶ嶽の裾野と，それから那須嶽の麓，この三つである。

1) 以下の引用は，岩波文庫の『温泉めぐり』2007年による。

.....

それに、この附近は日本でも冬一番雪の深いところで、汽車は一年に二度や三度はきまって其処で立往生をした。雪の壮観！.....

この高原、この特色のある高原の北に落ちたところに、越後の田口の停車場があるが、この停車場から西に一里半、その雄大な妙高の半腹に位置して、日本でも沢山はないほどの好眺望を持った赤倉温泉が展かれてあった。

.....

(pp.121-123, 文中の「田口停車場」は現在の妙高高原駅)

これに続き、「35 赤倉温泉」では、駅から温泉までの経路と温泉からの眺望(高田平野方面)を、「36 赤倉の一日二日」ではその他の景観や妙高火山について解説している。特に、妙高火山については山崎直方を Y 博士として取り上げ、次のように項を締めくくるのである。

私の知っている Y 博士は、青年時代にこの赤倉に本拠を置いて、妙高と焼嶽との研究に、半年以上もその山の中にいたということであった。

.....

赤倉は私の好きな温泉だ。それに、食物で割合に豊富だ。北海の生魚はいつも朝夕の膳に上った。
(pp.131-132)

3. 越後湯沢の記述などと比較して考える

瀬波温泉は項目名であるが、内容の多くは「この町(村上市)は、標式的山裾の町として私には忘れかねた」(p.225)や、瀬波温泉が油井掘削時に発見された事実の解説など、地理学的関心事であり、温泉自体の記述は少ない。

その他の県内温泉を総括的に扱うのは、「60 越後の諸温泉」である、そこでは、赤倉温泉に加え瀬波温泉が有名であろうかと断った上で、松の山温泉を第一にとりあげている。一方、現在は松の山温泉を凌ぐ越後湯沢温泉は、次のような記述である。

.....三国の大峠にかかろうとするところにある湯沢温泉は、昔は中々栄えたものであった。

.....しかし、汽車の出来た今はそこを通るものなどはもうなくなってしまったであろう。

湯沢の湯の煙は、冬は徒に堆雪に埋められてしまっているであろう。.....(pp.214-215)

当時、三国を貫く上越線は開通しておらず、関東と新潟県を結ぶ鉄路は妙高の裾野を通る信越本線であった。この後、1931年の清水トンネル完成による全通、1935年の『雪国』の発表・成功により越後湯沢温泉は発展していく。赤倉と比較すると、首都圏からの交通網の変遷と観光地の盛衰の関係を、知ることができるといえる。

その他、新潟市の「関屋温泉」(p.220)をはじめ興味は尽きない。温泉については、前号にみるように詳しい談話会参加者がいるので、今後いろいろ教えてもらいたいと考えている。

杉浦芳夫(1992):『文学のなかの地理空間—東京とその近傍』古今書院

前田 愛(1991):『文学の街—名作の舞台を歩く』小学館